

氏名 上廣 尚子

授与した学位 博士
 専攻分野の名称 経済学
 学位授与番号 博甲第2500号
 学位授与の日付 平成15年 3月25日
 学位授与の要件 文化科学研究科産業社会文化学専攻
 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 明治期輸出向け花菱生産の展開

学位論文審査委員 主査・教授 下野 克巳 教授 中藤 康俊
教授 内田 和子 教授 倉地 克直
二松学舎大学国際政治経済学部教授 神立 春樹

学位論文内容の要旨

本論文は、近現代日本の代表的な蘭菱業地域であった岡山県南部地域を主たる対象として、近代日本の経済発展過程における在来的産業の展開形態と輸出雑貨品の役割を解明する一つの事例として、明治20年代から30年代における輸出花菱業の発展過程を生産形態と労働力事情と資金の供給・運用の三つの側面から、多くの新たな資料に基づいて考察したものであり、五つの章から構成されている。

第1章「本論文の意義と花菱業の特質」では、まず第1節で在来的産業の一つとしての花菱業（畳表業と並ぶ蘭菱業の一つの柱で明治20年代から30年代において重要な輸出産業であった）の位置付けを行い、輸出花菱業ならびに輸出雑貨産業の生産形態に関する先行研究業績の論点を整理して、本論文の研究課題を花菱が輸出向け製品として急激な発展を遂げたことに着目しその実態と論理について、生産形態と労働力事情と資金の供給・運用の具体例を分析して解明することであると述べている。そして第2節で、輸出花菱の主要な生産地であった岡山県南部地域（都窪・吉備・御津・児島・浅口郡など）の全国的な位置付けともう一つの柱である畳表業と対比させた花菱業の特質を明確にしている。

第2章「花菱の生産形態」では、まず第1節で明治20年代から30年代の花菱業の生産形態に注目して分析を行い、明治28年を中心とする一度目の花菱生産のピークと明治35年を中心とする二度目のピークとでは主要な生産形態の差異がみられること、それは問屋制的生産からマニファクチュア生産へ生産形態が発展していくという理論的枠組みで把握できるものではなく、むしろ一度目のピークでは問屋制度のもとでマニファクチュアの「工場」が主要な役割を果たしていたのに対して、二度目のピークでは問屋制度のもとでありながら家内工業的生産者がほとんどとなっていたという実態を指摘して、そのことを論理的に整理する理論的枠組みについて考察している。そして第2節で、都窪郡早島村の早島物産株式会社・早島名産株式会社・有限責任正信社の事例と、第3節で浅口郡玉島村の和菱館（中原家）の事例とを対象とした具体的な生産形態の検討を資料に基づきながら行っている。

第3章「花菱業の労働事情」では、岡山県南部地域における豊富な低賃金労働力の存在とその位置付けに注目して第1節では花菱職工（労働者）の出自について、第2節では花菱職工の労働と生活について検討している。そして、農家の副業だけでなく専門的職工の割合も大きかったこと、専門的職工には主には香川県など県外からも含めた「移入職工」と地元の「通い職工」とがあったこと、厳しい労働条件と低賃金の移入労働者の存在が花菱生産の拡大を可能にしたことなどを解明している。

第4章「花菱業の資金供給源」では、マニファクチュアの「工場」の展開には地主資金の供給があったという先行研究の指摘をさらに具体的な事例によって分析していること、特に調達された資金がどのように運用されることによって「工場」を中心とした経営を可能にしたのか、供給側の地主の位置付けや地方銀行との関連はどのようであったかなどについての考察を、新たな資料を発掘しつつ深めている。

第5章「総括と展望」では、第1章から第4章までの本論文の論述のまとめを行うとともに、輸出向花菱生産業の二度のピークにおけるそれぞれの主要な生産形態の差異に注目したことの意義の再確認と、藺草生産地であった都窪郡の庄村の明治末期から戦前昭和期における花菱から畳表へと藺製品の主流の移行に伴う産業状態の変化の概要の検討を行うことにより、本論文で主として考察した内容の限界と今後の課題を述べている。

さらに末尾として、今後の研究にも参考となるいくつかの補足資料の詳細な追記がなされている。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2003年1月20日、学内審査委員4名、招聘審査委員1名によって行った。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、近現代日本の代表的な藺産業地域であった岡山県南部地域を主たる分析対象として明治20年代から30年代における輸出花菱業の発展過程の特質を、これまでの先行研究業績をふまえて花菱業の生産・経営の詳細な実態と輸出雑貨品生産業としての役割とについて、生産形態と労働力事情と資金の供給・運用との三つの側面を中心に、多くの新たな資料の探求・検討を行って分析・解明したものである。

本論文のとくに注目すべき功績について指摘すると次のようにまとめられよう。

第一は、明治期の輸出花菱業の資金の供給源と運用過程の実態について新たな資料の探求・検討に基づいて、会社形態の経営体の出資者の具体的な分析や運用資金の実際的な役割の分析やマニュファクチュア的「工場」の設立者の土地所有状況の分析などを行って、地主資金がどのように藺産業の資本に転化したか、どのような土地所有農家によって花菱「工場」が設立されたかの具体的な事例を明確にしたことである。

第二は、明治期の輸出花菱生産の二つのピークを主として担った生産形態の差異に注目することによって、マニュファクチュア的「工場」の生産形態と労働力事情の具体的な内容と役割そしてその経済的な限界などについて、多くの新たな資料を探求・検討することによってより詳細に分析していることである。

要約すると、予備審査の際にも評価されたいくつかの成果や、これまでの先行研究業績の不充分なあるいは残されていた問題点について、新たな史資料をさらに精力的に探求・検討することによって分析をより詳細で論理的に深めることによって、明治期の輸出花菱業の経済史的研究として集大成したものとして高く評価できるということである。

しかし、本論文にも問題がないわけではない。その一つは、問屋制的生産・経営形態とマニュファクチュア的生産・経営形態との関連・位置付けが十分に明解にされてないことである。もう一つは、藺産業地域における農閑期の豊富な余剰労働力の存在と香川県など他地域からの労働力供給の必要性との統一的な把握が不充分なことである。さらにいえば、論文仕上作業におけるいくつかのケアレスミスがみられることである。

とはいえ、こうした問題点の存在が本論文の主要な成果・功績を損なうものではないことと本論文が学位論文として十分な高い成果をあげていることについて、審査委員会は全員一致して評価した。

以上のことから、審査委員会は本論文を博士（経済学）の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。